

## 避難所 環境よりよく

写真は日本経済新聞 1月12日「阪神大震災 25年伝える つなぐ3」。災害時の避難所について問題を提起しているの、抜粋して紹介したい。

「簡単に組み立てられるね」。2019年11月、兵庫県三田市で震度6強の地震が起きたとの想定防災訓練。小学校の体育館で住民ら約40人が実際に避難所の設営を体験した。段ボールベッドを組み立て、高さ2メートルほどの間仕切りで囲むと外から見えない個人スペースが完成。主婦(45)は「このベッドなら暖かいし安定感もある。プライバシーも守られる」と満足そうに話した。市は19年度から間仕切りを新たに導入するなどプライバシーも重視。「避難所の環境向上は優先課題」(危機管理課)という。

兵庫県内の自治体が避難所の環境改善に力を入れる背景には25年前の苦い経験がある。阪神大震災から6日目。県内1152カ所の避難所には最大31万6700人が身を寄せた。2千人以上が詰めかけた避難所もあり、毛布にくるまって雑魚寝する光景が広がった。トイレは断水し、眠れない。仕切りはなくプライバシーもない。当時、神戸市では人口約150万人に、毛布の備蓄は約1800枚しかなく、民間企業や近隣自治体からの支援でまかなった。

「暖房のない避難所が多く寒い」「不衛生な床上で生活し空気がよどんでいる」一。避難所を支援した神戸協同病院院長の上田耕蔵医師の記録は、当時の劣悪な環境を裏付けている。

阪神大震災は避難所の大切さを認知させる契機となっただけではない。避難生活での体調悪化が深刻な事態を招くという現実も突きつける。

それは建物倒壊などによる直接死ではなく、災害と死亡の因果関係が認められる「災害関連死」だ。阪神大震災で知られるようになり、919人が認定された。上田医師によると、高齢者を中心に避難生活によるストレスは心疾患や脳卒中、肺炎などを引き起こしやすい。死に至るケースもあり、「避難所の環境改善が関連死の予防などに効果的」と指摘する。

南海トラフ巨大地震では最大500万人が避難所に押し寄せる可能性がある。

西日本豪雨や北海道地震など自然災害が猛威を振るう中、安心できる避難生活への備えは重要だ。改善への歩みに終わりはない。



(2020年1月16日)